「我が人生思い残すことなし」(前編)

作：北郷遥斗（きたごう はると）

※ 前回までのあらすじ ═══ 神戸大空襲の後、母と弟妹たちは広島へ疎開したが、昭男だけは、一人家に残った。戦況の行方を気にしながらも、間もなく実現する志願の日々を心待ちにひもじい毎日を送っていたある日、突然1年以上も行方不明だった父親が帰ってきた。═══

（尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp

7. 真実

「家、残っとったんやな。空襲大丈夫やったか。ちょっとはずれとったとは聞いたけど。」「大丈夫や。まあ、入りいな。」昭男は父を促した。「入りいなて、ここはわしの家や。こんなボロでもな。」父は、こんな時でも、軽口を忘れなかった。「何言うとんなん。ただの借家やないけ。」昭男も負けてなかった。

「ほんまか。」昭男は短く聞いた。「何がや。」「さっき言うてた事や。沖縄は玉砕したんか。大和は沈んだんか。ドイツは降伏したんか。」昭男にとってはどれも信じがたいことだった。昭男が毎日聞いていたラジオからは、そんな事は一切言われてなかった。いつも『善戦』、『転進』、『決戦間近か』という様な言葉ばかりだった。「それがそういう意味や。要は『負けてる』言うことや。お前何も知らんかったんか。」父は全て見越してるかの様に話した。「まあ。無理もないな。国民はそうやっていつも国に騙されてんねんや。それにな、今アメリカでえらいどでかい爆弾使っとるらしいで。一発で何万人も殺せるんやと。そうなったら、日本は終わりやで。人も街もみんななくなる。」昭男は呆然として、聞きながら、既に魂の置き場所を見失っていた。

父の言う事は、全部本当の事だった。『何も知らんかった。いや何も聞かされてへんかった』『俺はどないしたらええねん。』「ところで、母ちゃんらは。」父が思い出した様に聞いて来た。「広島に疎開しよった。高子も皆んな一緒や。」「そうかいな。実家のおばあちゃんとこか。その方が安心やな。お前は行かへんかったんかいな。何んでや。」「軍隊に入る。」ちょっと間があって、昭男は弱々しく答えた。「まだそんなこと言うとんのんかいな。さっきも言ったやろ。日本は負ける。死に行く様なもんや。」「死にたいんや。」昭男はやけくそになっていた。「あほ。簡単に死ぬ、死ぬ言うな。」「ええか。日本は負ける。しゃあけど国はなくならん。お前の一生はまだ始まったばかりや。先は長い。そういうもんの本当の勤めは、戦後の新しい日本を建設するために働くことや。」「若いもんがおらん様になったら日本はどないして立ち直んねん。」昭男は溢れる涙をこらえるのに必死だった。

「ほんでな。今、わし奈良におんねん。柿畑借りたしな。手伝どうてくれへんか。」今の昭男には、もう冷静に物事を考えることが出来なかった。「行けへんやろ。お母ちゃんら待っとらなあかんし・・・。」そう答えるのが精一杯だった。「ほんだら、広島まで迎えに行ったらええ。ほんで皆んなで移ろう。」父は繰り返し言ったが、昭男は首を縦には振らなかった。父は、次の日朝早く一人で帰って行った。昭男は一晩中眠れなかった。自分の人生が音を立てて崩れていくのに耐え切れなかった。

（つづく）